

研究論文

へき地保育所におけるインクルーシブな保育環境に関する研究

一気になる子どもを取り巻く保育の場と構成メンバーの分析を通してー

後藤 守・川端 愛子・後藤 広太郎*

(2015年10月30日受稿)

抄録： 本研究は「保育場面で気になる子ども」を取り巻く保育環境を明らかにし、インクルーシブな保育環境を構築していくための手がかりを得ることを目的としている。研究対象は、へき地保育所において「気になる子ども」の保育支援を担当している保育者である。調査の結果、次の7つのことが明らかにされた。①「入園当初の子どもの様子」では対人関係面の課題が多い。②「保育の場と保育体制」では、異年齢集団と同年齢集団の2つの集団構成を併用し、主担当者を軸に園全体で対応している。③「保育の方法」に関しては、さまざまな特性をもつ子どもたちが一緒に活動を共有できるように工夫している。④「まわりの子どもたちに与える影響」については「いたわり、思いやり、助け合う心が育つ」という項目内容の割合が最も高い。⑤「まわりの子どもたちが与える影響」では受容的な保育集団からプラスの刺激を与えられている。⑥「保育担当者に与える影響」では「気になる子ども」の存在を肯定的に受け止め、保育者自身の課題にしている傾向にある。⑦「これから求められる保育者の特性」では、エゴグラム¹⁹の5つの特性から構成された調査項目のうち、A（論理性）の特性群とNP（寛容性）の特性群の割合が高い。以上述べた7つの結果から、地域に密着したへき地保育所の持つ特性のなかに、これからのインクルーシブな保育を構築していく手がかりが内包されていると結論づけられた。

キーワード：保育場面で気になる子ども、インクルーシブな保育、へき地保育所

はじめに

本研究では、「気になる子ども」ということばをキーワードにしている。「気になる子ども」ということばは、保育現場における日常の保育実践のなかから出てきたものであるが、このことばには研究を進めるにあたって、示唆に富む情報が内包されている。「気になる子ども」ということばをキーワードにしたこれまでの研究は、大きく、2つに分類される。

その1つは、発達の観点からチェックリストなどを用いた研究があげられる。本郷は「気になる子ども」を乳幼児発達スケール（KIDS）と「気になる子ども」の行動についてチェックリストを用いて、保育者に「気になる子ども」についてア

ンケート調査をし、発達の特徴を詳細に捉えることで、その子どもへの支援のあり方を検討している²⁰。もう一つは、「気になる子ども」の周りの環境についての研究があげられる。刑部は正統的周辺参加論に即した分析をもとに、保育実践における保育者の援助と子どもの発達の関係構造を解明するため、発達研究の新しい方法論を模索している。そこでは、なぜ「気になる子ども」が気にならなくなったかは、保育者間の見方の変化、対象児と他児との関係の変化を引き起こした共同体全体が変容したことが関係していることを指摘している¹⁸。これらの研究を見ると、前者は「気になる子ども」の行動特性に着目し、その特性を明らかにしようとする研究であり、後者は「気にな

る子ども」の課題を保育者とその「気になる子ども」との関係のなかから明らかにしようとする研究であることがわかる。われわれの研究は、どちらかと言えば、後者の研究に分類される。後者の研究で重要なのは、保育者が「気になる子ども」をどのように見ているかという、保育者の評価的な見方や考え方が保育者の行動に反映し、そのことが「気になる子ども」の発達の変容に関係し、同時にまた、保育者と「気になる子ども」との関係の折り合わせにも影響を及ぼしていることである。

図1は、障害という問題を構成している要因とそれらの要因の相互の関係を概念図として、著者らがまとめているものである¹⁹⁾。この概念図を参考にして「気になる子ども」の問題を考えてみると、「気になる」という問題の重さはX軸要因（子どもの表出行動の特徴）、Y軸要因（X軸要因に対する保育者からの反応のひずみ）、Z軸要因（保育者から繰り出されるY軸要因に対する子どもの反応のひずみ）がかけ算的に組み合わせられた値(図

で言えば体積)で捉えることができる。X軸の要因には視覚、聴覚、知能あるいは行動面の特性などの問題が考えられる。一般に、子どもの障害特性にふれるとき、このX軸要因を重視する傾向があるが、問題解決型の視点に立てば、むしろ、重視すべき変数はY軸要因(保育者側の評価的態度・関わり)であるといつてよい。ここで注意すべきことは、Y軸要因は子どもの表出行動の特徴(X軸要因)が強ければ強いほど、そのひずみの割合を大きくするという形で、単純にX軸要因に従属しているものでないということである。むしろ、X軸要因を受け止める環境の側(保育者)が、X軸の要因をどのような側面から捉え、意味づけるかといった保育者の評価的態度やそれに基づく対応によって大きく変化する性質を持っていると考えられるからである。本研究で、「気になる子ども」ということばをキーワードにしていることの背景には、保育者の側の評価的態度の変容のプロセスのなかに、インクルーシブな保育の世界を作り上げていく大きな要因があると考えられるからである。

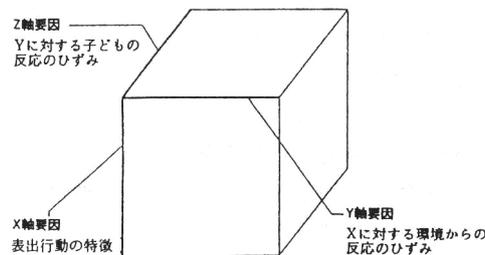


図1 障害という問題を構成する要因の関連図

I. 研究の目的

本研究は「保育場面で気になる子ども」を取り巻く保育環境を明らかにし、インクルーシブな保育環境を構築していくための手がかりを得ることを研究の目的としている。

以下に、「気になる子どもたち」を取り巻く保育環境に関する先行研究を通して、本研究の問題の所在を明らかにする。北海道における「気になる子どもたち」の保育の実態については、1976

年に実施された北海道社会福祉協議会の調査研究に端を発した、後藤らの一連の研究にその動向を見ることが出来る¹⁾⁻¹³⁾。特に、へき地保育所の保育の動向は、郡部保育所を対象とした調査研究を通して見ることが出来る⁹⁾。この論文では、5年間の時間間隔をおいて郡部保育所の動向を見ている。これを見ると、「気になる子どもたち」の受け入れ数は、116名(1988年度)から157名(1993年度)と1.35倍に増加している。「気にな

る子どもたち」の内訳は、知的発達面の支援が必要な幼児の割合が最も多く、全体の44.8%（1988年度）～33.8%（1993年度）の範囲にあり、次いで、言語発達面の支援が必要な幼児（16.4%～18.4%）、情緒発達面の支援が必要な幼児（16.4%～18.4%）が高い割合にある。これらの「気になる子どもたち」によって全体の78.1%～71.3%が占められている。都市部保育所と異なり、地域的制約から郡部保育所は他に代わりうる保育施設が限られていることから、地域の発達支援施設として、大きな役割が求められていることが推測される。これらの調査結果から、療育機関が限定的なへき地保育所においては、郡部の保育所のなかでも「気になる子どもたち」との出会いの機会が多いことが推測される。別な見方をすれば、地域に密着して存在しているへき地保育所は、他に選択肢のない状況のなかで、「気になる子どもたち」と保育を通して出会う確率が高く、保育者には高い保育支援力が求められていることを意味している。この保育支援力が十分に発揮されるには「気になる子どもたちを取り巻く場のあり方」が非常に重要であると考えられる。

「気になる子どもたち」をとりまく場について考えるとき、次の2つのことが検討される必要がある。そのひとつは「子どもの側からの自発的な表出行動に対する応答性のある保育環境作り」であり、もう一つは「構造化された保育の場の構成」である。これまでの保育の基本姿勢は「刺激の与え手」としての保育者のあり方について言及される場合が多いが、保育者の側から次々と繰り出す働きかけは、「気になる子どもたち」の自発的な行動を低減させがちである。同時にまた、子どもの選択する行動の範囲を狭めてしまう危険性がある。この点を克服するひとつの試みとして、子どもの側から繰り出してくる働きかけを上手に受け止め発展的に応答する「刺激の受け手としての保育者のあり方」が考えられる。子どもの側から繰り出してくる表出行動に対して、受容的かつ肯定的に応答し、その表出行動を応答の脈絡の中で補

完するかかわりの世界は一見、保育の目的性の薄いかわりのように見られがちであるが、子どもたちの能動性を重視するという見方に立てば極めて重要である。この「応答性のある環境作り」と密接に関連しているのが「構造化された場の構成に関する工夫」である。ともすれば、拡散しがちな「気になる子どもたち」の行動を間接的に方向づけ、安定化させるためにも「構造化された場の構成に関する工夫」は大切である。この保育支援のあり方は、われわれが開発した「文教ペンギンメソッド」の考え方と通底している。文教ペンギンメソッドによる指導では時間と空間を他者と共有する中で生じてくる子どもの行動を重視し、そのような行動が生起しやすいような場を設定して指導を展開していくところに力点が置かれている²¹⁾。そこでは、子どものかわり行動の自発的な生起を重視し、相互のかわり行動の連鎖の中で、ひとつの方向性を持つことができるような指導者間の相互連関性を持った動きが要求されている。この世界こそ、集団という場をベースにして、多様なニーズを持つ子どもたちの一人ひとりの気持ちと行動を受容していく「インクルーシブな保育」に接続していく保育の世界であると考えられる。へき地保育所は地域的制約のために、保護者にとっても、保育者にとっても選択肢が限られている状況にあるが、その制約こそが、子ども同士の自然な出会いを作りだしているとも考えられる。その意味では、へき地保育所の持つ地域的制約が子どもたちにとっては、逆に、地域に根ざした「活動の拠点としての場」として、位置づいていると考える。われわれの一連の研究ではへき地保育所の持つ特性を、以上のような視点から捉え、この特性を探る中で「気になる子どもたち」も他の子どもたちと一緒に時間と空間を共有する「インクルーシブな保育」の世界を作り出すための手がかりを探り続けている。

ところで、今回のへき地保育所を対象にした調査研究では「保育にあたって気になる子ども」とそれを取り巻く保育環境について、保育者から情

報を収集している。これらの子どもたちに対してどのような保育の場と保育支援をしているかを明らかにすることが本研究の第1の研究課題である。

本研究の第2の課題は、保育環境の中心的場（軸空間）を構築する保育担当者が、特別なニーズをもつ幼児もみんな一緒に「これからの保育」を進めるにあたって、どのような保育者が求められているかを、エゴグラムの特長を通して明らかにすることである。この特長を通して「保育にあたって気になる子どもを取り巻く受容的保育環境の主たる形成者としての保育者の特性」を明らかにする。このことに関わって、われわれは、保育所の園長を対象にして「保育担当者に求められる資質」に関する調査を進めてきた¹³⁾。それによれば「人柄がよく、子どもが好きな者」「理論より体を使って子どもと動き回ることができる者」「母親の相談をよく受け止める力のある者」の割合が高い傾向にあることが明らかにされている。これらの保育者像に関する情報は、さらに、へき地保育所と都市部の保育所の保育者を対象に「子どもについてのイメージに関するKJ法による分析」及び「交流分析をベースにしたエゴグラム・パターン分析」を通して明らかにしてきた^{14)~16)}。へき地保育所の保育者を対象にしたエゴグラムによる研究では、5つの特性群のうち、NP（Nurturing Parent：養育的な親としての特性）とA（Adult：大人としての特性）が中央部で突出し、左サイドにCP（Critical Parent：批判的な親としての特性）、右サイドにFC（Free Child：自由な子どもとしての特性）、AC（Adapted Child：従順な子どもとしての特性）がやや低い割合で位置した形のプロフィールが描かれている。このことからへき地保育所の保育者たちの考える「これからの保育に求められている保育者像」は、母性的特性を内包したNP特性をベースに、大人の自我状態を内包したA特性を中核にした台形型のプロフィールから構成されていることが分かる¹⁷⁾。本研究では、2004年度に、へき地保育所を対象に同一の調査方法で明

らかにされた、このNP特性とA特性が生み出す子どもの育ちを促す温かさとかかわり行動の安定性を内包した「これからの保育者像」が今回の調査研究で、どのような形で保持されているかを明らかにしていく。これらの特性は、発達期にある子どもの心的な安定性と自己肯定感を生み出す土壌として、心理臨床的に支持されうる特性であると考えられるからである。

Ⅱ. 方 法

1. 調査票の構成及び調査期日

本研究では「気になる子ども」を取り巻く保育環境を明らかにする意図から、北海道内のすべての「へき地保育所」156施設（閉所して返送された分は除く）を対象に調査票を送付し「気になる子ども」を担当している保育者から回答を求めた。調査票は園長記入用と気になる子どもを担当している保育担当者記入用の2種類から構成されている。本研究では保育担当者記入用の調査票を中心に回答結果の分析を進めていくことにする。

保育担当者記入用の調査票は、①回答対象にした「気になる子ども（以下、Aちゃんという）」の入園当初の子どもの様子について、②Aちゃんを取り巻く保育の場と保育体制について、③Aちゃんの指導法について、④Aちゃんの現在の状態について、⑤Aちゃんがまわりの子どもたちに与える影響について、⑥まわりの子どもたちがAちゃんに与える影響について、⑦Aちゃんが保育者に与える影響について、⑧Aちゃんの発達支援にあたって今後必要なことについて、⑨Aちゃんに対する今後の支援のあり方について、⑩Aちゃんにとって必要とされる保育者の特性について、⑪Aちゃんのイメージについて、の11項目から構成されている。調査期日は2015年9月である。

2. 分析対象

本研究では、調査対象とした北海道内のへき地保育所156施設のうち、回答のあった41施設のAちゃんの保育担当者64名の回答資料を分析の対象にする。なお、本研究では、保育担当者記入

用の調査票11項目のうち、①～③、⑤～⑦、⑩、の調査項目の回答資料を分析する。

Ⅲ. 結果と考察

1. Aちゃんの入園当初の行動特徴

表1は「気になる子ども（Aちゃん）」の入園当初の子どもの状態をまとめたものである。これを見ると、②「コミュニケーションが成立しない（最も該当53.1%、やや該当32.8%）」が最も高い割合を示している。次いで、④「特定のものに興

味を示したり、あるいは嫌がったりする（最も該当40.6%、やや該当31.2%）」の割合が高い。また、①「集団になじまない（最も該当34.4%、やや該当46.8%）」も高い割合を占めている。これらの3つの行動特徴は人との関わり、物との関わり、集団との関わりに共通した課題をもっていることがわかる。これに加えて、⑦「運動機能面において他児よりおくらしている（最も該当39.0%、やや該当34.4%）」の割合が高いこともAちゃんの入園当初の行動特徴として指摘される。

表1. Aちゃんの入園当初の行動特徴

()内は%

調査項目内容	回答状況	最も該当する	やや該当する	該当しない	無回答	合計
① 集団になじまない.		22(34.4)	30(46.8)	8(12.5)	4(6.3)	64(100.0)
② コミュニケーションが成立しない.		34(53.1)	21(32.8)	6(9.4)	3(4.7)	64(100.0)
③ 身の自立ができていない.		21(32.8)	17(26.6)	21(32.8)	5(7.8)	64(100.0)
④ 特定のものに興味を示したり、あるいは嫌がったりする.		26(40.6)	20(31.2)	14(21.9)	4(6.3)	64(100.0)
⑤ 指示されなければ自分で動こうとしない.		21(32.8)	22(34.4)	18(28.1)	3(4.7)	64(100.0)
⑥ 他児に乱暴する.		11(17.2)	15(23.4)	34(53.1)	4(6.3)	64(100.0)
⑦ 運動機能面において他児よりおくらしている.		25(39.0)	22(34.4)	14(21.9)	3(4.7)	64(100.0)

2. Aちゃんを取り巻く保育の場と保育体制

表2は、Aちゃんを取り巻く保育の場と保育体制に対する回答をまとめたものである。調査項目①②③は、子ども集団の構成を見たものである。項目①は、さまざまな年齢の子どもたちで集団を構成する「縦割り保育」、項目②は、同年齢の子どもたちで集団を構成する「横割り保育」、項目③は①と②の併用による保育集団構成であるが、Aちゃんを取り巻く保育集団は、項目③「縦割り保育と横割り保育の2つの保育形態を併用している」の割合が最も大きく、全体の60.9%がこの併用型の保育形態を採用していることがわかる。また、保育担当者とAちゃんとの関係では、項目

⑥「特定の担任がクラスを担当し、保育活動はその担任を中心として進められる」とする割合が81.2%と高く、基本的に、特定の保育者を軸にして保育活動が展開していることがわかる。この特定の保育者を軸にした保育活動の展開の仕方は、一見、従来のクラス固定式のイメージを持ちやすいが「縦割り保育と横割り保育の2つの保育形態を併用」というダイナミックな活動の流れのなかで、Aちゃんにとって特定の保育者の存在は非常に重要である。なぜならば、特定の保育者の存在は、場を構造化させていく上で極めて重要であるからである。

表2. Aちゃんを取り巻く保育の場と保育体制

()内は%

調査項目内容	回答状況	最も該当する	やや該当する	該当しない	無回答	合計
①縦割り保育で日常の保育活動を進めている.		27(42.2)	5(7.8)	31(48.4)	1(1.6)	64(100.0)
②横割り保育で日常の保育活動を進めている.		25(39.0)	6(9.4)	33(51.6)	0	64(100.0)
③縦割り保育と横割り保育の2つの保育形態を併用している.		39(60.9)	4(6.3)	20(31.2)	1(1.6)	64(100.0)
④基本的にはそれぞれの保育室での活動を重視して保育活動を進めている.		37(57.8)	1(1.6)	26(40.6)	0	64(100.0)
⑤主として、コーナーを設定するなどして、園全体を保育の場として保育活動を進めている.		23(35.9)	4(6.3)	36(56.1)	1(1.6)	64(100.0)
⑥特定の担当がクラスを担当し、保育活動はその担当を中心として進められる.		52(81.2)	3(4.7)	9(14.1)	0	64(100.0)
⑦保育体制は活動の内容によって、場や担当者を決めて全員で保育を進めている.		42(65.6)	2(3.1)	20(31.3)	0	64(100.0)
⑧園長及び保育主任が保育体制や保育の年間計画の原案を作成し、それに基づいて園の活動が進められている.		13(20.3)	6(9.4)	44(68.7)	1(1.6)	64(100.0)
⑨保育担当者全員で協議し、保育体制や保育の年間計画を決定し、園の活動を進めている.		54(84.3)	0	9(14.1)	1(1.6)	64(100.0)

3. Aちゃんに対する保育の方法

表3はAちゃんに対する保育の方法を見たものである。これを見ると、いずれの保育所も、項目①「他の子どもたちと一緒に保育している」の保育形態をとっており、項目②「特別なクラスを作って保育している」の保育形態を採用している保育所はない。項目⑤⑥は、保育時間に関する項目内容のものであるが、そのほとんどは、毎日通園させる保育所が一般的である。項目⑦⑧は、外部の専門機関との連携に関する項目内容のものである。これを見ると、項目⑦からは、最も該当76.6%と高い割合で相談機関や専門医と連携を取っていることがわかる。また、項目⑧からは、31.2%とその割合が高くないが、障がい児保育巡回指導専門員の訪問指導がAちゃんのような子どもがいる「へき地保育所」を支援する体制が徐々

に整い始めていることがわかる。項目⑨～⑬は、Aちゃんに対する保育支援の内容から構成されているものであるが、いずれの項目も「最も該当する」に回答する割合が高い傾向にある。項目⑭は、保護者支援に関する項目内容のものである。この項目も、最も該当すると回答した保育者が87.5%と高い割合にある。項目⑮は、保育所の保育者同士の支援協力体制に関する項目であるが、95.3%と高い割合で「Aちゃんを園全体で見えていくように保育者同士で心がけている」と回答している。

項目①から項目⑮の調査項目から得られた情報を総合的に見て見ると、Aちゃんの抱える発達課題を捉えつつも、その特性に必要以上に注意を奪われずに、さまざまな発達特性を持つ子どもたちが共通の場で活動を共有できる保育環境を提供していることがわかる。特に、①「他の子どもた

ちと一緒に保育している」, ⑨「人との関係や子ども集団になじみ, 行動できるように保育している」, ⑩「周りの子どもたちが, Aちゃんを理解してくれるように保育している」, ⑮「Aちゃんを園全体で見えていくように保育者同士で心がけてい

る」, の調査項目の割合が高い傾向にあることは, 「分離型の保育形態」から「統合型の保育形態」へ, さらには「インクルーシブな保育形態」へと自然な形で移行する条件がへき地保育所の置かれている環境のなかに内包されているように思われる。

表3. Aちゃんに対する保育の方法

()内は%

調査項目内容	回答状況	最も該当する	やや該当する	該当しない	無回答	合計
①他の子どもたちと一緒に保育している.		64(100.0)	0	0	0	64(100.0)
②特別なクラスを作って保育している.		0	1(1.6)	63(98.4)	0	64(100.0)
③一般の子どもたちのクラスに入れて, 個別の保育も行っている.		18(28.1)	0	46(71.9)	0	64(100.0)
④特別なクラスを作っているが部分統合を行い, 徐々にみんなと一緒に保育する方向をとっている.		2(3.1)	0	62(96.9)	0	64(100.0)
⑤毎日通園させるようにしている.		58(90.6)	0	6(9.4)	0	64(100.0)
⑥特別な時間だけ保育している.		1(1.6)	0	63(98.4)	0	64(100.0)
⑦相談機関, または専門医に相談しながら保育をしている.		49(76.6)	1(1.6)	14(21.9)	0	64(100.0)
⑧障がい児保育巡回指導専門員の訪問指導を受けながら保育をしている.		20(31.2)	0	44(68.7)	0	64(100.0)
⑨人との関係や子ども集団になじみ, 行動できるように保育している.		63(98.4)	0	1(1.6)	0	64(100.0)
⑩会話が成立し, また, 自分から話せるように保育している.		61(95.3)	0	3(4.7)	0	64(100.0)
⑪周りの子どもたちが, Aちゃんを理解してくれるように保育している.		53(82.8)	4(6.3)	5(7.8)	2(3.1)	64(100.0)
⑫自分で身の回りのことができるように保育している.		64(100.0)	0	0	0	64(100.0)
⑬Aちゃんの興味を引き出すように工夫している.		61(95.3)	0	2(3.1)	1(1.6)	64(100.0)
⑭Aちゃんの保護者に助言したり, 相談にのっている.		56(87.5)	4(6.3)	3(4.7)	1(1.6)	64(100.0)
⑮Aちゃんを園全体で見えていくように保育者同士で心がけている.		61(95.3)	0	2(3.1)	1(1.6)	64(100.0)

4. Aちゃんがまわりの子どもに与える影響

表4は, 「Aちゃんがまわりの子どもたちに与える影響」について見たものである. この調査項目の結果を見ると, 「いたわり, 思いやり, 助け合

う心が育つ (最も該当46.9%, やや該当35.9%) 「お互いに助け合い, 集団としてのまとまりができる (最も該当26.6%, やや該当45.3%)」とプラスの影響を指摘する回答が多い. 特に, 項目⑤に

その傾向が反映している。また、割合は高くはないが項目⑧「Aちゃんから学びとるものが多く、周りの子どもたちの生活経験が広がる（最も該当15.6% ,やや該当31.3%）」とインクルーシブな保育の効果の兆しを指摘する回答も認められている。その反面、割合は高くはないが、項目③の回答に象徴されるように「保育の流れがさまたげられ、他の子どもたちが課題や遊びに集中できなくなる（最も該当26.6% ,やや該当34.4%）」とマイナスの影響を指摘する保育者も認められる。

インクルーシブな保育を進めていくにあたって

大切なことは「Aちゃんの存在が必ずしも、まわりの子どもたちに好ましくない影響を与えていない」と捉えている保育姿勢にあると考える。この肯定的かつ受容的保育姿勢こそが、インクルーシブな保育を推進させていく大きな原動因になると考えられる。その意味では、へき地保育者の保育姿勢のなかに、高い割合ではないが、調査項目②、⑤の項目内容に関する「気づき」が認められることは、インクルーシブな保育を推進させていくうえで重要なことのように思われる。

表4. Aちゃんがまわりの子どもたちに与える影響

()内は%

調査項目内容	回答状況	最も該当する	やや該当する	該当しない	無回答	合計
①身についた生活習慣がくずれる。		5(7.8)	6(9.4)	53(82.8)	0	64(100.0)
②お互いに助け合い、集団としてのまとまりができる。		16(25.0)	29(45.3)	19(29.7)	0	64(100.0)
③保育の流れがさまたげられ、他の子どもたちが課題や遊びに集中できなくなる。		17(26.6)	22(34.4)	25(39.0)	0	64(100.0)
④Aちゃんのまねをして好ましくない行動をする。		11(17.2)	13(20.3)	40(62.5)	0	64(100.0)
⑤いたわり、思いやり、助け合う心が育つ。		30(46.9)	23(35.9)	11(17.2)	0	64(100.0)
⑥まわりの子どもがAちゃんの世話をやきすぎ、まわりの子どもが自分のことをおろそかになる。		3(4.7)	13(20.3)	48(75.0)	0	64(100.0)
⑦保育者がAちゃんにつきっきりになってしまうことから、まわりの子どもに不満が生じる。		0	19(29.7)	45(70.3)	0	64(100.0)
⑧Aちゃんから学びとるものが多く、周りの子どもたちの生活経験が広がる。		10(15.6)	20(31.3)	34(53.1)	0	64(100.0)

5. Aちゃんに与えるまわりの子どもの影響

表5は「まわりの子どもたちがAちゃんに与える影響」について回答結果をまとめたものである。これらの結果を見ると、Aちゃんに与えるプラスの影響に関する項目群①～③、⑤～⑧、⑩において、いずれも「最も該当する」の割合が高い傾向にあることが明らかにされた。特に、項目⑩「好きなお友達ができる（最も該当71.9% ,やや該当20.3%）」、項目⑦「幼稚園・保育所に積極的に来るようになる（最も該当60.9% ,やや該当

21.9%）」、項目③「生活習慣の自立が促進される（最も該当70.3% ,やや該当23.4%）」、項目①「まわりの子どもたちから刺激を受け、発達が促進される（最も該当68.7% ,やや該当14.1%）」にその特徴的傾向が認められる。これと対照的に、項目④⑨⑪などのマイナスの影響を指摘する回答は極めて少ないことが明らかにされた。Aちゃんに対する個別の対応と違って、子ども集団をベースにした保育活動の場合、Aちゃんに対する保育者の力量もさることながら、Aちゃんを取り巻く子ど

も一人ひとりの心の育ちを支援する保育者の力量が大きく問われる側面がある。その意味では、へき地保育所のAちゃんを担当している保育者の力

量の高さが、表5のような回答結果を導き出したと考えることができる。

表5. まわりの子どもたちがAちゃんに与える影響 ()内は%

調査項目内容	回答状況	最も該当する	やや該当する	該当しない	無回答	合計
①まわりの子どもたちから刺激を受け、発達が促進される.		44(68.7)	9(14.1)	11(17.2)	0	64(100.0)
②みんなと遊べるようになり、友達関係が広がる.		34(53.1)	25(39.1)	5(7.8)	0	64(100.0)
③生活習慣の自立が促進される.		45(70.3)	15(23.4)	4(6.3)	0	64(100.0)
④仲間はずれにされるので、ひとりであることが多くなる.		0	9(14.1)	55(85.9)	0	64(100.0)
⑤以前よりも行動が活発になる.		35(54.7)	17(26.5)	12(18.8)	0	64(100.0)
⑥周りの子どもから学びとるものが多く生活経験が広がる.		35(54.7)	16(25.0)	12(18.8)	1(1.6)	64(100.0)
⑦幼稚園・保育所に積極的に来るようになる.		39(60.9)	14(21.9)	10(15.6)	1(1.6)	64(100.0)
⑧指導に従って集団行動ができるようになる.		31(48.4)	25(39.1)	7(10.9)	1(1.6)	64(100.0)
⑨まわりの子どもが世話をやきすぎAちゃんが自立できない.		2(3.1)	6(9.4)	56(87.5)	0	64(100.0)
⑩好きなお友達ができる.		46(71.9)	13(20.3)	3(4.7)	2(3.1)	64(100.0)
⑪周りの子どもに強制されたり叱られたりすることが多いためかんしゃくを起こしたり甘えることが多くなる.		6(9.4)	19(29.7)	38(59.4)	1(1.6)	64(100.0)

6. Aちゃんが保育者に与える影響

表4及び表5の回答結果では、いずれも、Aちゃんにおいてもまわりの子どもたちにとっても、プラスの影響を指摘する回答の割合が多い傾向にあった。特に、この傾向はAちゃんへの影響において顕著に認められた。それでは、Aちゃんの存在が保育者にどのような影響を与えているのであろうか。表6はその結果をまとめたものである。これを見ると、項目⑩「子どもの発達の筋道について、あらためて勉強することができる（最も該当73.4%、やや該当21.9%）」、項目①「発達面に課題のある子どもについて、勉強することができる（最も該当68.7%、やや該当25.0%）」、項目⑤「困難をのりこえて成長する子どもの生きる力に喜びを感じる（最も該当54.7%、やや該当34.4%）」、項目⑧「子どもを見る目が育ち、指導技術がこまやかになる（最も該当50.0%、やや該当43.8%）」の項目群において、Aちゃんの存在

が保育者の意識や行動にプラスの影響を与えていることがわかる。その反面、項目⑫「保護者に、Aちゃんのもつ問題やこれからの取組を理解してもらうことに工夫が求められている（最も該当56.1%、やや該当21.9%）」、項目⑦「一般の子どもの数倍の注意や労力がある（最も該当53.1%、やや該当28.1%）」という項目群において、工夫や労力を伴う困難さがあることを指摘している。また、その割合は大きくないが、項目②のように、「専門的な知識が無いのでいつも不安である（最も該当17.2%、やや該当56.1%）」という保育者自身の不安を指摘した回答も見受けられる。

これらの結果を全体的に見てみると、へき地保育所のAちゃんの保育担当者はAちゃんとの出会いと交わりを肯定的かつ受容的に捉え、そこでの経験をよりステップアップした次元での経験知にしようとする前向きな姿勢が認められる。

表6. Aちゃんが保育担当者に与える影響

()内は%

調査項目内容	回答状況	最も該当する	やや該当する	該当しない	無回答	合計
①発達面に課題のある子どもについて、勉強することができてよい.		44(68.7)	16(25.0)	4(6.3)	0	64(100.0)
②専門的な知識が無いのでいつも不安である.		11(17.2)	36(56.1)	15(23.4)	2(3.1)	64(100.0)
③助け合う子どものための保育者の集団が育ってくるのでよい.		28(43.8)	29(45.3)	4(6.3)	3(4.7)	64(100.0)
④保護者から感謝されやりがいを感じる.		16(25.0)	33(51.6)	13(20.3)	2(3.1)	64(100.0)
⑤困難をのりこえて成長する子どもの生きる力に喜びを感じる.		35(54.7)	22(34.4)	4(6.3)	3(4.7)	64(100.0)
⑥一般の子どもの保護者の理解が得られず苦勞する.		4(6.3)	15(23.4)	43(67.2)	2(3.1)	64(100.0)
⑦一般の子どもの数倍の注意や労力がある.		34(53.1)	18(28.1)	10(15.6)	2(3.1)	64(100.0)
⑧子どもを見る目が育ち、指導技術がこまやかになる.		32(50.0)	28(43.8)	3(4.7)	1(1.6)	64(100.0)
⑨Aちゃんに手をとられ、一般の子どもたちに対する指導が十分できない.		2(3.1)	33(51.6)	28(43.8)	1(1.6)	64(100.0)
⑩子どもの発達の筋道について、あらためて勉強することができる.		47(73.4)	14(21.9)	1(1.6)	2(3.1)	64(100.0)
⑪記録の整理、保育者との連絡などに時間をとられることが多い.		20(31.3)	25(39.1)	17(26.5)	2(3.1)	64(100.0)
⑫保護者に、Aちゃんのもつ問題やこれからの取組を理解してもらうことに工夫が求められている.		36(56.1)	14(21.9)	12(18.8)	2(3.1)	64(100.0)

7. Aちゃんにとって必要とされる保育者の特性

表7は、Aちゃんにとって必要とされる保育者の特性についてまとめたものである。この項目は、交流分析をベースにしたエゴグラムの設問から5つの類型に対応する項目をそれぞれ2項目抽出し、アンケート項目として作成している。項目①と項目⑤はCP尺度項目群、項目③と項目⑧はNP尺度項目群、項目⑦と項目⑨はA尺度項目群、項目②と項目⑩はFC項目尺度群、項目④と項目⑥はAC尺度項目群として構成されている。

表7をみて見ると、最も該当するとした回答の割合の高い項目として、項目⑨「わかりやすく物事を表現できること（最も該当93.4%、やや該当3.1%）」、項目⑧「人の長所に気づきほめること

ができること（92.6%、やや該当3.1%）」、項目⑦「何事も事実にもとづいて判断できること（最も該当71.9%、やや該当項目23.4）」、項目③「困っている人を見ると手助けすること（最も該当64.1%、やや該当31.3%）」をあげることができる。これらの項目は、A尺度項目群として、項目⑨、項目⑦が1つにまとめられ、NP尺度項目群として、項目⑧と項目③が1つにまとめられる。一方、これと対照的なのがCP尺度項目群である。この尺度項目群として、項目①及び項目⑤があげられる。項目①は「物事に批判的であること（最も該当7.8%、やや該当17.2%）」、項目⑤は「相手の不正や失敗にきびしくできること（最も該当12.5%、やや該当70.3%）」と、両項目とも「最も該当す

る」と回答した割合は少ない。ただし、「やや該当する」という回答の割合は項目①と項目⑤では、項目①が17.2%であるのに対して、項目⑤では70.3%）とその割合に違いを見せている。最後に、C尺度項目群について見てみよう。C尺度項目群はFC（Free Child）とAC（Adapted Child）の尺度項目群から構成されている。FC尺度項目群は項目②と項目⑩から構成されている。表7を見ると、項目②「好奇心が強いこと」は、最も該当59.4%、やや該当37.5%と高い割合にあるのに対して、項目⑩「じょうだんを言ったり、かるぐちをたたいたりできること」は、最も該当21.9%、やや該当45.3%とやや割合は抑えられており、項目群のなかで1つの方向にまとまりきれていない結果になっている。このことは、ACの尺度項目群においても指摘される。ACの尺度項目群のうち、項目④「不快なことでもがまんできること（最も該当51.6%、やや該当39.1%）」は回答の割合が高いが、項目⑥「遠慮がちであること（最も該当3.1%、やや該当34.4%）」は相対的に低い傾向に

ある。

全体的に見てみると、2004年度の研究とほぼ、同様な結果が認められている¹⁶⁾。しかし、2004年度の研究では、NP尺度項目群の割合が相対的に高く、A尺度項目群がそれと対になった台形方のプロフィールの構成であったが、今回の研究では、むしろ、A尺度項目群が相対的に高い割合になっており、NP尺度項目群がそれに対になった台形型になっていることが指摘される。このことは、各項目群の記述内容から明らかなように、A尺度項目群の特性（項目⑦、⑨）は、事実に基づいて物事を判断しようとする自我状態で構成されているものである。このA尺度項目群の特性が、共感、思いやり、保護、受容など、子どもの成長を促すような母親的部分から構成されているNPの特性より相対的に高い割合にあることは、保育者の持つNPの特性をより安定した形で発揮させ、方向性のある保育を展開していくうえで、重要であると考えられる。

表7. Aちゃんにとって必要とされる保育者の特性

()内は%

調査項目内容	回答状況	最も該当する	やや該当する	該当しない	無回答	合計
①物事に批判的であること.		5(7.8)	11(17.2)	47(73.4)	1(1.6)	64(100.0)
②好奇心が強いこと.		38(59.4)	24(37.5)	0	2(3.1)	64(100.0)
③困っている人を見ると手助けすること.		41(64.1)	20(31.3)	1(1.6)	2(3.1)	64(100.0)
④不快なことでもがまんできること.		33(51.6)	25(39.1)	4(6.3)	2(3.1)	64(100.0)
⑤相手の不正や失敗にきびしくできること.		8(12.5)	45(70.3)	10(15.6)	1(1.6)	64(100.0)
⑥遠慮がちであること.		2(3.1)	22(34.4)	39(60.9)	1(1.6)	64(100.0)
⑦何事も事実にもとづいて判断できること.		46(71.9)	15(23.4)	2(3.1)	1(1.6)	64(100.0)
⑧人の長所に気づきほめることができること.		59(92.6)	2(3.1)	0	3(4.7)	64(100.0)
⑨わかりやすく物事を表現できること.		60(93.4)	2(3.1)	0	2(3.1)	64(100.0)
⑩じょうだんを言ったり、かるぐちをたたいたりできること.		14(21.9)	29(45.3)	19(29.7)	2(3.1)	64(100.0)

IV. 結 語

本研究は「保育場面で気になる子ども」を取り巻く保育環境を明らかにし、インクルーシブな保育環境を構築していくための手がかりを得ることを目的とした。研究対象は、へき地保育所において「気になる子ども」の保育支援を担当している保育者である。調査の結果、「どのような保育の場と保育支援を展開しているか」という第1の課題に対して次のことが明らかにされた。「入園当初の子どもの様子」では、対人関係面の課題が多いこと。このことは、広い意味での「かかわり行動面の困難さ」に、これらの子どもたちは直面していることを意味している。「保育の場と保育体制」では、異年齢集団と同年齢集団の2つの集団構成を併用し、主担当者を軸に園全体で対応していることが明らかにされた。ここでは、保育の場の構造化と軸空間における主担当者の存在が大きな意味を持つことが指摘された。また、「保育の方法」に関しては、さまざまな特性をもつ子どもたちが一緒に活動を共有できるように工夫していることが指摘され、「インクルーシブな保育」の土壌が生まれてきていることが明らかにされた。

ところで、へき地保育所の保育実践は「気になる子ども」と「その子どもを取り巻く他の子どもたち」にどのような影響を与えているであろうか。この設問に対する回答を見ると、Aちゃんと一緒にいることによって「いたわり、思いやり、助け合う心が育つ」という回答の割合が最も高いことが明らかにされた。一方、まわりの子どもたちがAちゃんに与える影響では、さまざまな形でプラスの刺激を与えていることが明らかにされている。さらに、保育者に与える影響では、Aちゃんの存在を肯定的に受け止めていること、そして、Aちゃんの存在が保育者自身の成長の原動因になっていることが指摘された。

最後に、第2の課題である「これから求められる保育者の特性」では、エゴグラム5つ特性から構成された調査項目のうち、A（論理性）の特性群とNP（寛容性）の特性群の割合が高いこ

とが明らかにされた。特に、今回の調査では、2004年の調査研究と比較して、事実に基づいて物事を判断するA特性が、共感、思いやり、保護、受容など、子どもの成長を促すような母親的部分から構成されているNPの特性よりも高い割合になっていることが明らかにされた。このA尺度項目群の特性が、共感、思いやり、保護、受容など、子どもの成長を促すような母親的部分から構成されているNPの特性より相対的に高い割合にあることは、保育者の持つNPの特性をより安定した形で発揮させ、方向性のある保育を展開していくうえで、重要であると考えられる。

以上の結果から、地域に密着したへき地保育所の持つ特性のなかに、これからのインクルーシブな保育を構築していくための手がかりが内包されていることが明らかにされた。

文 献

- 1) 北海道社会福祉協議会（第19号調査委員会）：障害をもつ幼児の保育の実態と指導方法に関する基礎的研究（中間報告），1976.
- 2) 後藤 守：北海道における障害児保育の動向と課題（Ⅰ）. 北海道教育大学僻地教育研究, 26 (1) : 57-67, 1979.
- 3) 後藤 守：北海道における障害児保育の動向と課題（Ⅱ）. 北海道教育大学僻地教育研究, 28 (1) : 77-88, 1981.
- 4) 後藤 守, 小笠原詠子：統合保育の動向. 北海道教育大学紀要（第1部C）, 35 (2) : 101-114, 1985 (a).
- 5) 後藤 守, 小笠原詠子：北海道郡部における障害児保育の動向と課題. 北海道教育大学僻地教育研究, 39 (1) : 101-111, 1985 (b).
- 6) 後藤 守, 小笠原詠子, 井上栄子：統合保育の動向（Ⅱ）. 北海道教育大学紀要（第1部C）, 36 (1) : 201-211, 1985 (c).
- 7) 後藤 守, 小笠原詠子, 小笠原 仁：北海道郡部における障害児保育の動向と課題（第2報）. 北海道教育大学僻地教育研究, (44) :

- 31-41, 1990.
- 8) 後藤 守, 小笠原詠子, 小笠原 仁, 金澤克美: 障害児保育に関する地域的特性に関する研究. 北海道教育大学僻地教育研究, (45): 15-26, 1991.
- 9) 後藤恵美子, 金澤克美, 小笠原詠子, 三浦 哲, 後藤 守: 障害児保育における地域的特性に関する研究. 北海道教育大学僻地教育研究, (49): 7-16, 1995.
- 10) 後藤 守: 北海道の障害児保育20年. 北海道乳幼児療育研究, (8): 37-45, 1995.
- 11) 後藤恵美子: 障害をもつ子どもをとりまく保育環境に関する検討. 北海道心理学研究, (18): 71-82, 1995.
- 12) 後藤 守, 後藤恵美子, 金澤克美: これからの障害児の保育と教育に関する保育者の意識 (I). 北海道教育大学紀要 (第1部C), 45 (2): 173-177, 1995.
- 13) 後藤 守, 後藤恵美子, 金澤克美: へき地保育所における障害児保育. 北海道教育大学僻地教育研究, (52): 35-42, 1998.
- 14) 高久宏一, 後藤恵美子, 後藤 守: へき地保育所の保育者が求める保育者像に関する臨床心理学的アプローチ. 北海道教育大学僻地教育研究, (52): 133-138, 1999.
- 15) 後藤 守, 後藤恵美子, 金澤克美, 高久宏一: これからの保育に求められる保育者像に関する臨床心理学的研究. 北海道教育大学紀要, 51 (2): 53-61, 2001.
- 16) 後藤広太郎, 高久宏一, 後藤 守: へき地保育所の受容的保育環境に関する発達臨床心理学的アプローチ - 「気になる子ども達」に対する保育者の保育姿勢の分析を通して-. 北海道教育大学僻地教育研究, (59): 115-126, 2004.
- 17) 東京大学医学部心療内科編著: 新版エゴグラム・パターン. 金子書房, 1995.
- 18) 刑部育子: 「ちょっと気になる子ども」の集団への参加過程に関する関係論的分析. 発達心理学研究, 9 (1): 1-11, 1998.
- 19) 後藤 守, 後藤恵美子, 植木克美: 行動空間療法の理論と実際. コミュニケーション障害研究, (11): 1-38, 2007.
- 20) 本郷一夫, 飯島典子, 平川久美子: 「気になる」幼児の発達の遅れと偏りに関する研究. 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 58 (2): 121-132, 2010.
- 21) 小田進一, 川端愛子, 後藤 守: ICTを活用したこれからの保育実践研究-クリッカーを活用した「ペンギンメソッド」の研究を素材にして-. 子どもロジー, 19: 113-119, 2015.

A Study on an Inclusive Childcare Environment at Childcare Centers in Remote Areas:

An Analysis of Childcare Conditions for Children Who Need Special Attention

GOTOH Mamoru, KAWABATA Aiko, and GOTOH Kotaro

Abstract: One aim of the current study was to ascertain childcare conditions for “children who need special attention in a childcare setting.” Another aim of this study was to identify tips to help create an inclusive childcare environment. Subjects were childcare providers who assisted childcare centers in remote areas to care for “children who need special attention.” This study yielded 7 findings: (1) “A child’s demeanor upon his or her initial arrival at the center” often signaled issues with interpersonal relationships; (2) “Childcare settings and systems of childcare” grouped children of the same age and of different ages, and a “child who needed special attention” was dealt with by all of a center’s childcare providers (and especially the childcare provider caring for such a child); (3) “Forms of childcare” were devised so that children with different traits could participate in activities together; (4) “The effect that a child who needed special attention had on other children” was most often handled with “sympathy, kindness, and a cooperative spirit”; (5) “The effect that other children had on a child who needed special attention” was a positive one in that a receptive childcare group had a positive influence; (6) “The effect that a child who needed special attention had on childcare supervisors” tended to be a matter for the individual childcare provider with regard to whether he or she reacted positively to the inclusion of “a child who needed special attention”; and (7) “The traits that childcare providers need to have” while caring for “a child who needed special attention” were identified. Childcare providers were assessed in terms of the 5 ego states in an egogram and were most often rational (adult, or A) and supportive (nurturing parent, or NP). Based on the 7 findings above, the seeds of inclusive childcare can be found in the characteristics of childcare centers in remote areas with close ties to the community.

Keywords: children who need special attention in a childcare settings, inclusive childcare,
childcare centers in remote areas